ID	受理日	番号	報告者名	一般名	生物由来成分名	原材料名	原産国	含有区分	文献	症例	適正使用措置	感染症(PT)	出典	概要
												B型肝炎	第31回日本血液事業学会総会 2007年10月 3-5日	平成19年3月、輸血によるHBV感染が疑われるとの報告が千葉県赤十字血液センターにあった。因果関係の確認のために実施した当該輸血用血液製剤に係る保管検体個別NATは陰性であり、献血者追跡調査を行った。1名の献血者が平成19年1月にB型肝炎を発症したとの情報が得られ、調べたところ、献血者のHBV-DNAは患者のそれと塩基配列が一致した。20プールNAT陰性、HBV保管検体個別NAT陰性であったが、献血者追跡調査により輸血用血液製剤からのHBV感染が示唆された症例であった。
												HIV感染、C型肝炎、B型肝炎	第31回日本血液事業学会総会 2007年10月 3-5日 シンポジウム4-2	日本赤十字社血液事業本部が関わる安全対策の取り組みと感染症リスクについて報告する。平成16年から18年までの3年間に全国の医療機関から日赤血液センターに報告された輸血関連感染症(疑い症例を含む)の報告数は749例であった。日赤の安全対策の実施によりHBV、HCV及びHIVの感染リスクは減少し、安全性は高くなった。しかし、HCV及びHIVも含め遡及調査の実施により確認された感染症例も少なくない。感染拡大を防止するための安全対策を引き続き講じていく必要がある。
												B型肝炎	第31回日本血液事業学会総会 2007年10月 3-5日 一般演題51	2004年8月よりNATスクリーニングのプールサイズを50から20に縮小した。大阪府赤十字血液センターで検出されたHBV-NAT陽性事例81人を基にプールサイズ縮小の効果等について解析を行った。プールサイズ縮小後に100コピー未満/mLのHBV-NAT陽性者の比率が高くなっていることから、縮小による効果があると思われた。追跡調査、遡及調査及び医師の面談等による総合的な解析によりHBV低濃度キャリアが疑われる献血者がプールサイズ縮小後に多く検出されていることが推察された。
												感染	Vox Sanguinis 2007; 93(Suppl.2): 31	日本赤十字社(JRC)が全国的ヘモビジランス体制を導入してから14年が経過した。報告された輸血副作用症例数は年間約2000例で、過去3年間はほぼ一定である。非溶血性輸血副作用は報告症例の約80%を占め、輸血関連急性肺障害などが含まれる。輸血感染症の報告数は年々減少している。JRCのヘモビジランスは病院の自発報告に基づいており、病院と血液センターとの協力が不可欠である。